

吾妻鏡(東鑑)

作者: 不詳(鎌倉幕府奉行人)

成立: 14世紀初



解題

Keyword

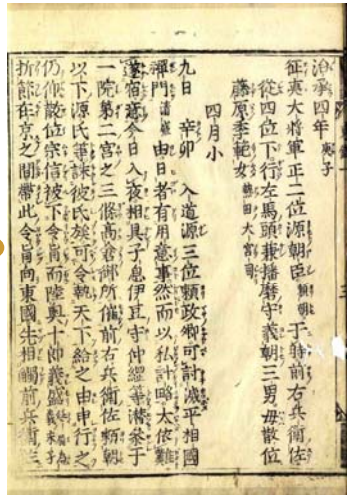
- 鎌倉幕府
- 将軍記
- 金沢氏
- 武家政権
- 右田弘詮
- 徳川家康
- 西笑承兌
- 菅聊卜

鎌倉幕府創始期から鎌倉時代中期に至るまでの事歴を、鎌倉幕府が編年体で編纂した歴史書で、日本中世史研究の基本史料とされている。

成立経緯

本書の原本は伝えられておらず、早い時期に散逸したと考えられている。成立経緯については不明な点が多い。

編纂の時期については、源氏三代の将軍記は文永の頃(1270年代前半)、それ以後の将軍記は正応3年(1290)から嘉元2年(1304)の頃に成立したという二段階編纂説が説かれてきたが(八代国治『吾妻鏡の研究』)、これについては、益田宗(「吾妻鏡の伝来について」)や笠松宏至(「徳政・偽文書・吾妻鏡」)らの批判がある。それらの研究では、北条本の第42巻の宗尊将軍記の袖書に後深草院の出家のことが記され、その死去については記されていないことから、本書の成立を正応3年の後深草院出家以後、嘉元2年の死去以前とし、さらに本書に収録されている多くの文書については、永仁の徳政令の発布時期と関連するものが多いことから、永仁5年(1297)以後に成立したとしている。したがって、本書は、ほぼ14世紀初頭に一括して編纂されたと考える



(版本)『新刊吾妻鏡 巻1』菅聊卜校訂

のが妥当とされている。

## ■ 作 者

編纂にあたった人物は、明らかではないが、一人の編者が編纂したのではなく、複数の幕府奉行人によって編纂されたと考えられている。編纂主導者としては、北条氏得宗(とくそう：鎌倉幕府執権北条氏の嫡流の当主)とするのが通説であるが、14世紀初頭に問注所執事であった太田時連(ときつら)を有力候補とし、幕府の中枢部にあった北条氏一門である金沢氏、政所執事の二階堂氏の協力によって編纂されたとの指摘がある(五味文彦『吾妻鏡の方法(増補)』)。

## ■ 内 容

治承4年(1180)4月9日の以仁王(もちひとおう)の挙兵から文永3年(1266)7月20日に宗尊親王が京都に戻るまでの87年間に及ぶ歴史が、日記のように編年で綴られており、歴代の将軍ごとに数巻ずつ記事をまとめた将軍記の体裁をとっている。文体は「吾妻鏡体」とも称され、当時の代表的日用文体である和風の変型漢文体である。頼朝将軍記など初期の記事には説話的な内容が多く、多数の文書が掲載されているが、時代が下るにつれて文書は少なくなり、事務的な内容が中心となる。

本書は、本文である地の文の他、文書や御家人の交名(きょうみょう：人名を列記したもの)などによって構成されている。編纂の材料は主として、幕府の公事を執行した奉行人の日記である。それを補完するものとして、藤原定家の『明月記』などの公家日記や諸家・諸寺社の文書が利用された。また、『金槐和歌集』『六代勝事記』などの文学作品も使われたとの指摘がある。

本書は、後世の編纂物であるため、単純な誤りや編纂上の立場からの加筆と思われる部分があるが、それによって本書の価値が失われることはない。本書は、東国に成立した武家政権の成立過程と展開を記している点に大きな特徴があり、鎌倉幕府の研究のみならず、武家社会の解明に欠くことのできない史料である。

## ■ 諸 本

成立経緯に不明な点が多いのと同じく、諸本についても不明確な点が多い。前述のとおり、本書の原本は伝えられておらず、近世以前に完本に近い形で伝わった写本もなかったため、不足している部分を補いながら伝えられた。本書の写本には多くの種類があるが、中でも重要なものは、吉川本(きっかわぼん)・北条本・島津本の3種である。

吉川本は、大内氏の重臣・右田弘詮(みぎた・ひろあき)が散在していた写本を書写収集して、大永2年(1522)に写し直した本で、のち吉川氏に伝来したものである。年譜1冊と本文47冊からなり、その構成・本文テキストともに独自性が強い。吉川本は、明治44年(1911)に東京帝国大学史料編纂掛(現・東京大学史料編纂所)に貸与されるまでは吉川家に秘蔵されており、近世にはその存在は知

られていなかった。現在、吉川史料館所蔵、重要文化財に指定されている。

北条本は、江戸時代初頭より多くの刊本の底本として利用されてきた。北条本という名称は、もと小田原北条氏の所蔵であったという所伝からきているが、徳川家康所持本に、小田原北条氏から黒田孝高・長政のもとを経て徳川秀忠に献ぜられた本などによる増補が施されて、51冊(全52巻のうち巻45欠)に仕立てられたものと考えられている。江戸幕府の紅葉山文庫を経て、現在は内閣文庫の所蔵となり、重要文化財に指定されている。

島津本は、15世紀末に二階堂家から島津家に贈呈された『吾妻鏡』をもとに、補訂が行われて成立したのと考えられている。巻構成は巻首目録1冊と本文51冊となっている。慶安3年(1650)、島津家から江戸幕府に『吾妻鏡』が献上されたと伝えられ、現在の島津本は、その時作られた写しと考えられている。北条本と系統を同じくしながら、北条本にない記事も多く含み、これを補うものとして利用されている。現在、東京大学史料編纂所所蔵、島津家文書の一部として国宝に指定されている。

本書が初めて刊本になったのは、慶長10年(1605)である。徳川家康は本書を愛読書としていたが、これを武将のための教訓書として広めるため、相国寺(京都)の僧・西笑承允(せいしょうじょうたい)に命じて、北条本の『吾妻鏡』を底本として古活字本を出版させた。寛永3年(1626)には、慶長の古活字本をもとに、菅聊ト(かんりょうぼく)が詳細な訓読を付したものが整版本で刊行され、その後の本書の読み下しに多大な影響を与えることとなった。この寛永版は需要が多かったようで、京都の書肆・杉田良庵によって後刷版が刷られ、さらに寛文元年(1661)には野田庄右衛門が版元となって出版された。寛文8年には、より読みやすい平仮名本が徳川家綱の命で出版されている。

明治29年(1896)、高桑駒吉等によって北条本を底本に諸本を用いて校訂した『校訂増補吾妻鏡』が刊行された。明治36年(1903)に北条本を底本とした続国史大系本が出版され、大正4年(1915)には、吉川本を底本とし、北条本等諸本により校訂したものが国書刊行会から刊行された。これらの刊行によって本書の活字本を比較的容易に読むことができるようになった。

さらに、大正15年(1926)、寛永版を底本とし、吉川本や続国史大系本等を対照して校訂を行った日本古典全集本が刊行された。これは、研究者のみならず広く一般に読まれることをめざしたもので、文庫本サイズで刊行された。昭和7年(1932)には、現在広くテキストとして用いられている新訂増補国史大系本が刊行された(のち普及版刊行)。これは北条本を底本とし、諸本と対校したものである。そして、昭和11年(1936)には、初学者を対象に、読みやすさに主眼を置いて編集された『校訂吾妻鏡(雄山閣文庫)』が、吉川本を底本として出版された。

また、新訂増補国史大系本を底本とし、寛永版の訓読を参照して仮名交り文にしたものが岩波文庫本(1939-1944)で刊行されたが、5巻(巻32、暦仁元年12月)までで中絶している。昭和18年(1943)には寛文版本を底本とし、諸本を参考として書き下し文にした『訳文吾妻鏡標註』が刊行されているが、これも第

2冊(巻18、承元元年12月)までで、未完である。この他、訓読本としては、新訂増補国史大系本を使用して『吾妻鏡』全巻を漢字仮名交り文に読み下した『全訳吾妻鏡』(1976～1979)が刊行されている。

さらに、『吾妻鏡』に著者の解釈を加えて現代語訳した『新釈吾妻鏡』(1985)や『吾妻鏡』を漫画化した『吾妻鏡(マンガ日本の古典)』(1994-1996)、『新訂増補国史大系』本を底本に本書の全文を現代語訳した『吾妻鏡：現代語訳』(全16巻 2007年～刊行中)なども出版され、現在では様々な形で本書を読むことができるようになった。索引類としては、御家人制研究会編『吾妻鏡人名索引』などが刊行され、本書を読む際に役立っている。



## 構成

※巻は新訂増補国史大系本の該当巻

※実朝將軍記と頼経將軍記の区切りは研究者によって見解が異なる。

頼朝將軍記	治承4年(1180)～建久6年(1195)	1巻～15巻
頼家將軍記	正治元年(1199)～建仁3年(1203)	16巻～17巻
実朝將軍記	建仁3年(1203)～承久3年(1221)	18巻～25巻
頼経將軍記	承久4年(1222)～寛元2年(1244)	26巻～35巻
頼嗣將軍記	寛元2年(1244)～建長4年(1252)	36巻～41巻
宗尊將軍記	建長4年(1252)～文永3年(1266)	42巻～52巻



## 史料本文を読む

### <版本>

- \*『新刊吾妻鏡』全26冊 富春堂 1605(慶長10)
- \*『新刊吾妻鏡』全25冊(初印・献上本は51冊) 菅聊ト校訂 1626(寛永3)
- \*『新刊吾妻鏡』全25冊 杉田良庵 1626
- 『新刊吾妻鏡』全25冊 菅聊ト校訂 野田庄右衛門 1661(寛文元)  
[K24/22/1～25]
- \*『新刊吾妻鏡』全51冊 [中野等和撰] 1668 (寛文8)

### <影印本>

- 『振り仮名つき吾妻鏡：寛永版影印』阿部隆一解題 汲古書院 1976  
[K24/109]
- \*『卷子本吾妻鏡(元暦元年)』前田育徳会尊経閣文庫 1981(原装影印古典籍複製叢刊)
- ◆\*萩原義雄「新資料・西教寺蔵『吾妻鏡抄録』(零古写本)について：付・影印資料およびその国語学的考察」(『駒沢大学北海道教養部論集13』 駒沢大学北海道教養部 1998)

### <翻刻本>

- 『校訂増補吾妻鏡』全10冊 高桑駒吉他校訂 大日本図書 1896

#1 吾妻鏡(東鑑)

[K24/123-1/1~10]

- \*『吾妻鏡』全2冊 経済雑誌社 1903 (続国史大系 4・5)
- 『吾妻鏡 吉川本』全3冊 山田安栄他校訂 国書刊行会 1915  
[210. 4/2/1~3] ※1968年名著刊行会より復刊 [K24/60/1~3]
- 『吾妻鏡』全8冊 日本古典全集刊行会 1926 (日本古典全集)  
[K24/116/1~8]
- 『吾妻鏡』全2冊 黒板勝美編 吉川弘文館 1935-1936 (新訂増補国史大系  
32・33) [210. 08/4/32~33] ※初版は1932-1933年国史大系刊行会より刊行
- 『吾妻鏡』全6冊 橋本実校訂 雄山閣 1936-1939 (雄山閣文庫)  
[K24/142/1~6]
- 『吾妻鏡』全4冊 黒板勝美編 吉川弘文館 1971-1974 (新訂増補国史大系  
普及版) [K24/60A/1~4]
- ◆\*菊池伸一「財団法人前田育徳会所蔵の『吾妻鏡』の古写本について」  
(『吾妻鏡の総合的研究』安田元久(研究代表者) 文部省科学研究費補助金  
研究成果報告書 1992)

<訓読・注釈>

- \*『仮名東鑑』全2冊 黒川真道編 集文館 1912 (日本歴史文庫)
- \*『校註仮字吾妻鏡』佐藤仁之助著 明治書院 1937
- 『吾妻鏡1~5』龍肅訳注 岩波書店 1939-1944 (岩波文庫)  
[K24/66/1~5] [K24/66A/1~5] ※未完
- 『訳文吾妻鏡標註』第1~2冊 堀田璋左右著 名著刊行会 1973  
[K24/82/1~2] ※未完、1943年東洋堂刊の復刻版
- 『全訳吾妻鏡』全6冊 貴志正造訳注 新人物往来社 1976-1979 (索引あり)  
[K24/111/1~6]
- ◆\*高橋伸幸「釈文 吾妻鏡略解」(『史料と研究』(5)~(13)札幌大学高橋  
研究室 1976-83)
- ◆岡田清一「『吾妻鏡』註釈1~7」(『東北福祉大学紀要』5(2)~12 東北  
福祉大学 1980-1987) ※1~3のみ所蔵(抜刷のコピー複製) [K24/192]
- \*『『吾妻鏡』諸本の収集とその研究』遠藤好英(研究代表者) 文部省科  
学研究費補助金研究成果報告書 1990

<現代語訳・その他>

- 『新釈吾妻鏡』全2冊 小沢彰著 千秋社 1985 [K24/206/1~2]
- 『吾妻鏡』全3冊 竹宮恵子著 中央公論社 1994-1996 (マンガ日本の古典  
14・15・16) [K24/316/1~3]
- \*『吾妻鏡：寛永版本 CD-ROM』岩波書店 2001 (国文学研究資料館デー  
タベース古典コレクション)
- 『吾妻鏡：現代語訳』全16冊 五味文彦他編 吉川弘文館 2007-  
[K24/428/1~] ※刊行中

<索引等>

- 『吾妻鏡地名社寺索引』武相史料刊行会 1963 (武相史料叢書4) [K24/112]

- 『吾妻鏡人名索引』全3冊 国学院大学日本史研究会 1968-1970 [K24/58/1~3]
- 『吾妻鏡人名索引』御家人制研究会編 吉川弘文館 1971 [K24/58A]
- 『吾妻鏡総索引』及川大溪著 日本学術振興会 1975 [K24/114]  
※1999年東洋書林より復刊
- 『吾妻鏡地名索引』国学院大学日本史研究会編 村田書店 1977 [K24/117]
- 『寛永三年版吾妻鏡卷第二漢字索引』峰岸明・横浜国大東鑑之会編 笠間書院 1979 [K24/161]
- 『吾妻鏡人名総覧』安田元久編 吉川弘文館 1998 [K24/341]
- 「吾妻鏡・玉葉データベース CD-ROM版」吉川弘文館 1999
- 『吾妻鏡事典』佐藤和彦他編 東京堂出版 2007 [K24/426]



## 史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆星野恒「吾妻鏡考」(『史学雑誌』vol.1(1) 山川出版社 1889 [Z205/1/1])
- ◆原勝郎「吾妻鏡の性質及其史料としての価値」(『史学雑誌』vol.9(5)(6) 山川出版社 1898 [Z205/1/9])
- ◆和田英松「吾妻鏡古写本考」(『史学雑誌』vol.23(10) 山川出版社 1912 [Z205/1/23])
- ◆丸山二郎「吾妻鏡諸本雑考」(『歴史地理』vol.61(5) 吉川弘文館 1933 [Z210.05/5/61])
- 特輯「吾妻鏡」(『古典研究』vol.1(3) 雄山閣 1936 [K24/265])  
※内容：龍肅「吾妻鏡の解題」、和田英松「吾妻鏡の伝本に就て」、堀田璋左右「始て吾妻鏡を讀む者の為に」、秋山謙蔵「吾妻鏡の歴史性」、橋本実「吾妻鏡を中心として観たる鎌倉御家人に就て」、魚澄惣五郎「吾妻鏡は一大戯曲」、皆川剛六「吾妻鏡と伊豆」、木谷祥隆「吾妻鏡研究の歴史」他
- ◆川瀬一馬「徳川家康の開版事業」(『古活字版之研究』川瀬一馬著 安田文庫 1937 [022.3/2/1])
- ◆平田俊春「吾妻鏡と六代勝事記」(『吉野時代の研究』平田俊春著 三一書房 1943 [210.4/21])
- ◆\*益田宗「吾妻鏡のものは吾妻鏡にかえせ：六代勝事記と吾妻鏡」(『中世の窓』(7) 中世の窓同人 1960)
- ◆\*益田宗「吾妻鏡のものが吾妻鏡にかえられない話」(『中世の窓』(8) 中世の窓同人 1961)
- ◆和田英松・八代国治「吉川本の伝来及び価値」(『吾妻鏡 吉川本3』名著刊行会 1968 [K24/60/3])
- ◆\*野口武司「吾妻鏡の編纂技法」(『国学院大学大学院紀要1』国学院大学大学院 1970)
- ◆益田宗「吾妻鏡の本文批判のための覚書：吾妻鏡と明月記との関係」

#1 吾妻鏡(東鑑)

(『東京大学史料編纂所報』(6) 東京大学史料編纂所 1972 [Z018/9])

- ◆阿部隆一「解題：吾妻鏡刊本考」(『振り仮名つき吾妻鏡：寛永版影印』汲古書院 1976 [K24/109])
- ◆永原慶二「史書としての吾妻鏡」(『全訳吾妻鏡1』新人物往来社 1976 [K24/111/1])
- 『吾妻鏡の研究』八代国治著 芸林舎 1976 [K24/115]  
※1941年刊の覆刻版。初版は1913年吉川弘文館より刊行。1941年明世堂書店より修正復刊。
- ◆\*益田宗「吾妻鏡の伝来について」(『論集中世の窓』中世の窓同人編 吉川弘文館 1977)
- ◆\*石田祐一「吾妻鏡頼朝記について」(『論集中世の窓』吉川弘文館 1977)
- ◆平田俊春「吾妻鏡編纂の材料の再検討」(『日本歴史』(486) 吉川弘文館 1988 [Z210.05/3])
- ◆高橋伸幸「『吾妻鏡』：その成立と編者」(『国文学 解釈と鑑賞』vol.54(3) 至文堂 1989 [Z910.5/16])
- ◆笠松宏至「徳政・偽文書・吾妻鏡」(『中世人との対話』笠松宏至著 東京大学出版会 1997 [210.4FF/343])
- ◆高橋秀樹「歴史記録への招待4 『吾妻鏡』」(『歴史読本』vol.44(4) 新人物往来社 1999 [Z210/508])
- ◆\*井上聡・高橋秀樹「内閣文庫所蔵『吾妻鏡』(北条本)の再検討」(『明月記研究』(5) 明月記研究会 2000)
- 『吾妻鏡の方法(増補)』五味文彦著 吉川弘文館 2000 [K24/253A]
- ◆五味文彦・井上聡「吾妻鏡」(『国史大系書目解題 下巻』皆川完一他編 吉川弘文館 2001 [210.08/90/2]) ※「『吾妻鏡』関係文献一覧」あり
- ◆高橋秀樹「口絵解説『吾妻鏡』」(『三浦一族史料集 吾妻鏡編 I～IV』三浦一族研究会編 横須賀市 2001-2004 [K28.3/12/1-1~1-4])
- ◆五味文彦「『吾妻鏡』の成立と編纂」(『鎌倉期社会と史料論』鎌倉遺文研究会編 東京堂出版 2002 (鎌倉遺文研究3) [K24/351/3])
- ◆高橋秀樹「吾妻鏡原史料論序説」(『中世の内乱と社会』佐藤和彦編 東京堂出版 2007 [210.4SS/510])
- ◆高橋秀樹「吾妻鏡の諸本」(『吾妻鏡事典』佐藤和彦他編 東京堂出版 2007 [K24/426])
- ◆角田朋彦「吾妻鏡研究の軌跡」(『吾妻鏡事典』佐藤和彦他編 東京堂出版 2007 [K24/426])
- ◆五味文彦「『吾妻鏡』とその特徴」(『吾妻鏡：現代語訳1』五味文彦他編 吉川弘文館 2007 [K24/428/1])
- ◆井上聡「『現代語訳吾妻鏡』の底本について」(『吾妻鏡：現代語訳1』五味文彦他編 吉川弘文館 2007 [K24/428/1])